

## アルゼンチン日本語文学論 : 『巴茶媽媽(パチャママ)』について

守屋, 貴嗣 / Moriya, Takashi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

221

(終了ページ / End Page)

243

(発行年 / Year)

2012-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007854>

# アルゼンチン日本語文学論

——『<sup>バ</sup>茶<sup>マ</sup>マ』について——

守屋 貴嗣

MORIYA Takashi

## 1、アルゼンチンへ向かう移民たち

「移民」には渡航の際の条件などから、大別して自由移民と契約移民の二種類がある。自由移民は、渡航のための費用、乗船料を自身で負担し、単独もしくは家族の少人数で渡航し、現地での仕事探しも自身で行うものである。契約移民は、移民会社が現地の農園や鉱山などと契約し、移住民を募集して移民船を用意し、集団で移住するものである。日本からの戦前移民は大半がこの契約移民であった。ハワイなどの成功者が帰国して「海外雄飛」が評判になり、「移民」が盛んになった日露戦争後には、移民会社が日本に60社ほどもあった。契約移民は船賃の一部と支度金を支払い、一定期間の労働契約を移民会社と結び、現地に到着後は勝手に辞めることは出来ないという契約であった。移民会社の提供する情報は、実際の移民生活とは異なる場合も多く、言語も通じない異国の地で、期待に反した劣悪な労働に従事した人々も多かった。

1908年に神戸港から笠戸丸で南米に渡った日本人移民の多くは、シンガポール、インド洋、ケープタウン経由のいわゆる「西回り」でブラジル・サントス港に向かった。移民の募集条件は3人以上の労働力を有する家族で、現地のコーヒー農園での就労であり、そのために夫婦関係や家族関係を偽って乗り込んだ「偽装家族」もあった。サントス港到着後、移民たちは予定されたコーヒー農園に振り分けられ

労働するが、その年のコーヒー豆は不作で、「普通一人に付一日平均五六袋位は採取し得るものなり」「移民一人に付一日の純収入金壹円貳拾銭と仮定すれば三人の一家族にて優に三円六十銭の純収入を毎日貯蓄することを得るものとす」（『日系移民資料集南米編』第1巻）とされていたコーヒー豆は1袋程度の収穫であり、食糧や食器などの購入費で差し引かれ、借金になった。故郷への送金どころか、自分たちの生活にも困る事態に直面し、移民たちは公使館や通訳に陳情を訴え抗議をするが、殆どの場合は相手にされず、その反感と窮乏から、やがて逃亡する者が増加した。全く予想に反した低賃金で、は渡航以来の借金を返す見込みが立たないこと、言葉が通じず、日常生活で不自由する場面が幾多も発生したこと、過重な労働と食生活の違いから健康を損ね、最悪の場合は死に到る移民が増大したことなどが逃亡の原因として挙げられるが、移民会社の援助も指導も極めて不十分であったことが、逃亡という事態を招いた決定的な要因となったことは指摘出来るだろう。

笠戸丸移民のその後は、耕地に到着後の半年間で契約地を去った者が430名にのぼった。さらに1年後には、耕地に留まっていたのが191名であったという<sup>(註1)</sup>。そこでは「正確な数字を得るわけにはいかないが」との断りの後、移民たちの移動先について、西北鉄道敷設工事人夫120名、サントス市中110名、サンパウロ市中102名、サンパウロ州内の他耕地40名、リオデジャネイロおよびミナス州にある者38名、死亡6名、そしてアルゼンチン転住者160名との調査結果を報告している。多少の差異はあるものの、類似する記述はその後の南米移民の記録や回想にも登場する数字であり、2ヶ月近い航海を経て地球の裏側まで移動した当時の移民たちは、情報に乏しく、著しく故郷と異なった環境から必死の労苦を経験することになる。そのような南米で、当時最下層の扱いを受けていた先住民や、他の植民地からの奴隷階層と同様の労働条件と差別を受けたことは、日系移民のアイ

デンティティ崩壊を招くことになったと考えられる。この時期の移民たちは、移民先での永住が目的ではなく、日本国内で働くよりもはるかに多くの収入が得られ、「10年で1万円」「故郷に錦を飾る」といった文句を合い言葉のように渡航した「出稼ぎ」労働者であり、移民会社の募集勧誘も、初期のハワイ移民や北米移民の成功談を比較対象として宣伝していたため、全く異なる耕地の現状に対しての失望が大きかったと言えよう。日露戦争での戦勝により、日本が世界の強国の仲間入りをしたという意識も作用していたかもしれない。現地で形成された日系社会の中で、成功して財貨を貯め帰国した者、現地で経済的社会的基盤を築いた者がある一方、辛うじて帰国した者、異国で貧しさや病のために命を終えた者も少なくない。そのような情況のなか移民たちは、故郷に対する美化された意識で自己意識の崩壊を防ぐ。母国に対するノスタルジーや愛国心は移民一世に共通した心情である。そして同時に、終戦時のブラジルの勝ち組負け組抗争のような、同胞間の対立や嫉妬からトラブルが起きる要因ともなっていく。

このようなブラジル移民と、アルゼンチン移民には制度上大きな違いがある。戦前戦後を通して多くの南米移民は、移民会社や政府間の取り決めに基づく集団的契約移民であり、一定の組織的制度的システムの中で渡航が行われた。しかしアルゼンチンについては戦前そうした「移民ルート」は存在せず、戦後移民もごく短期間を除いて、国策に沿った集団移民はほとんどなされなかった。初期のアルゼンチンへの日本人移民は、単身あるいは小家族で、時には非合法に入国した者であった。最初期の入国者の例では、1900（明治33）年に日本に回航したアルゼンチンの海軍練習艦サルミエント号に給仕として乗り込んだ、当時16歳のしんやよしお榎葉賛雄と13歳の鳥海忠次郎が正規移民の第一号として知られているが<sup>(註2)</sup>、他にも政府職員や貿易商などの渡航は確認されているものの、本格的な移住者が現れるのは笠戸丸移民以降である。しかしその前後にもチリやペルーから歩いてアンデス山脈を越

える、いわゆる「アンデス越え」をして入国した例や、ブラジルやボリビアなどの契約地を逃亡し、国境を越えて入国した人々がいたという記録は残っている。当時は入国審査や旅券の保持などもすり抜けることが出来たようであり、不法に移住した日本人は相当数いたと考えられる。前述の笠戸丸移民の移動先に従うならば、アルゼンチンへの移住者は「160名」いたことになる。その理由として香山六郎は、「ブラジルに向かう船中でアルゼンチンの方が有望だとあちらに向かう二、三人の人に彼らは扇動されていたともきいた。退耕して一時サンパウロに留まった者も先発連中のアルゼンチンをほめたたえた報に接して南下していった」（香山六郎『香山六郎回想録—ブラジル第一回移民の記録—』サンパウロ人文科学研究所、1976・9 148頁）と述べており、過酷で採算の取れないブラジルのコーヒー農園で働き続けるよりも、アルゼンチンの大きな街に移った方が条件の良い仕事がありはるかに稼げる、と移民たちが考えた当時の状況が記述されている。

現在の我々は、金融不安の続くアルゼンチンや他の南米諸国を、貧困を抱えた発展途上国と見なしがちであるが、20世紀初頭のアルゼンチンは、明治期の日本帝国よりもずっと経済的社会的に先進国であったことを考慮しなければならない。広大な土地と農産物、地下資源にも恵まれ、スペインやイタリアから来た植民者が作り上げたアルゼンチンは、第一次世界大戦当時は世界第5位の富裕国であり、ヨーロッパのカトリック文化を基盤としながら繁栄し、荒廃するヨーロッパから移り住む白人の国であった。特に首都ブエノスアイレスは、19世紀後半には鉄道網が敷設され、電話が普及し、上下水道整備も行われているインフラが整った、都市景観も整備された「南米のパリ」と言われる大都市であった。その豊かさは、人よりも牛の数が多いという牧畜と、広大な農地から産出する農作物が、18世紀以来アフリカ大陸からの奴隷や移民で急増した北米や、隣国ブラジルへの食料輸出で潤ったことにも一因がある。現在でもアルゼンチンは食糧自給率が

200%を超過する農業国だが<sup>(註3)</sup>、第二次世界大戦までの時期は、経済恐慌に喘ぐアメリカやヨーロッパ諸国に、有り余る牛肉や穀物類を輸出して高い経済発展を遂げていた国であった。所有する大農園や、経営企業から莫大な利益を上げていた当時のブエノスアイレスの上流階級は、大邸宅に住み、豪華なパーティで音楽と踊りを楽しみ、時には豪華客船でパリやマドリードに、使用人だけでなく朝食用の牛乳を搾るために乳牛を連れて遊びに行く、という優雅な生活が出来たという。これはブラジルをはじめとする、他の南米諸国とはかなり異なる特徴であり、人口構成を見ても、アルゼンチンは圧倒的に南ヨーロッパからの移民である白人人口が大多数を占める国である<sup>(註4)</sup>。ブラジルやペルーのように、ヨーロッパ系の白人人口が半数で、先住民との混血、アフリカ系黒人やアジア系の移民の子孫が残りや占めている国とは大きく異なっていることがわかる。

1914年の国勢調査によると、当時のアルゼンチンには1,007名の日本人移民が居住しており、その内でも半数以上がブエノスアイレスに集中していた<sup>(註5)</sup>。日本人移民が当時就業していた仕事は、主に「洗染業」(洗濯クリーニング業)と「花卉栽培・蔬菜作り」であった。「洗染業」は大都市ではスペイン語を話せなくても仕事が出来、「花卉栽培・蔬菜作り」も都市居住者相手の近郊農業であり、日本人移民に向いていたと言われる。スペイン語を話すことが出来た場合、「カフェ店」へもかなりの人数が就業した。皿洗いなどの下働きから始め、自分の店を持つ成功者も現れている。これらの人々が後続の日本人移民を雇い、面倒をみるようになり、日系社会が形成されていく。

## 2、戦後のアルゼンチン日系社会

日本人の戦後の海外移住は、アルゼンチンから始まっている。その最初は近親者の呼び寄せに限定されていたが、次第に対象範囲が拡大されていった。

アルゼンチンは第二次世界大戦時、世界で最後に日本・ドイツといった枢軸国と断交、宣戦布告をした国であった。断交したのは1944年1月27日であり、国交断絶を宣言せざるを得なかったというのが実情であったと言えよう。それから1年2ヶ月後の1945年3月27日に日本とドイツに対して宣戦を布告した。断交によってすべての通信が禁止され、宣戦布告によって当時の邦字新聞『亜爾然丁時報』『日亜時事』『南亜日報』の3紙は発行禁止となり、米軍の慶良間列島上陸を最終ニュースとして姿を消すこととなった。ちなみにブラジルでは1941年の時点で邦字新聞はすべて発行禁止にされており、情報の途絶がその後の勝ち組負け組抗争の大きな要因となったことはすでに多くの研究によって指摘されている通りである。

邦字紙は発行禁止となったが、アルゼンチンの日系社会においては情報が途絶された訳ではなかった。1947年までは、在亜日本人会やニッパル花卉産業組合、銀河畔園芸協同組合といった団体が、ガリ版刷りのニュースを日系移民たちに配布していた。また日本からの短波放送、スペイン語の『ラ・プレンサ』『ラ・ナシオン』といった現地新聞からも情報を得ることが出来た。そのような背景があったため、アルゼンチンの日系社会においては、ブラジルほどの大規模な混乱は起きなかった。そして1948年にはついに日系移民二世たちのアルゼンチンへの帰国が開始されるのである。

その後は自由移民が大阪商船とオランダのロイヤル・インターオーシャン・ラインズといった民間レベルで進行していく。自由移民であるため、渡航費は個人負担であった。移住再開の最初期に渡航した人々は戦前と異なり、一家で永住する家族や帰国するアルゼンチン二世が混じり合った状態であった。

近親者に限定されていた呼び寄せ移住も次第にその対象者を拡大していく。1955年には計画移住が開始されることになるが、それに先立って日本政府は1953年9月に外務省欧米局に移住課を設置し、ア

ルゼンチンの日系社会側では同年10月に「アルゼンチン拓殖協同組合」(略称、亜拓)が設立される。この年は「日本アルゼンチン通商協定」が締結され、大阪商船は東航南米航路を再開した。戦後初の一般公募による呼び寄せ移住は、アンディノ・クラブが母体であった。この「アンディノ・クラブ」とは、1933年から41年までの7期にわたってアルゼンチンに送られた外務省農業実習生の同窓会的性格の親睦互助団体である。最初は「実習移民同志会」としてスタートし、「八紘同志会」と名称変更し、第二次大戦後には「アンディノ・クラブ」とさらに名称変更した団体で、機関誌として『牧笛』がある。

アンディノ・クラブは、後継者の呼び寄せ費用を積み立てなどで工面し、戦後初の公募単独青年移住制度を発足させ、数人の特殊技術者を3年間受け入れ母体となって成功させたが、毎年5～6人ずつ特殊技術者を呼び寄せようと構想するアンディノ・クラブと、大量移住のプロジェクトを立案していた外務省側との思惑の不一致により、以降の公募単独青年移住は、亜拓を通して渡航費の政府貸し付けによる計画移住に制度化していくこととなる。『アルゼンチン日本人移民史 第二巻戦後編』(在亜日系団体連合会・FANA、2006・8)には、アルゼンチンにおける戦後の日本人移住の推移を「①初期の一等親(妻・子・親)、知人による呼寄せ。②一般公募の呼寄せ移住、外務省実習制度、青年商工業移住制度による雇用独身者移住。③ミシオネス州ガルアペーをはじめとする移住地造成自営開拓。④日亜移住協定締結後のアルゼンチン政府移住地への入植。」(114頁)との4項目に分類し、まとめている。

さらに、本論考で注目すべきは、国際協力事業団による「海外開発青年」制度である。この制度は1985年から発足した「海外移住に関心を持つ青年の中から開発途上国の経済社会開発に寄与し得る技術・技能を有する者を募集・選抜し、日本人移住者や日系人が多数在住している中南米諸国において、一定期間(3年間)現地で活動する

ことにより、現地事情や自己の海外生活への適性をみずから確かめたうえで、将来移住すべきかどうかを決断する機会をもつことができるようにしようとする制度」<sup>(註6)</sup>である。この初年度は、応募者 265 名に対して最終合格者は 29 名（男 22、女 7）であった。アルゼンチンには 5 名（うち女性 1 名）が渡っている。

前述した制度によって、「外務省農業実習生」として 1939 年にアルゼンチンに渡った増山朗。そして 1986 年に国際協力事業団による「海外開発青年」として渡重した関口伸治と宮本俊樹。およそ 50 年の時を経て、ともにアルゼンチンに移住した彼らが中心的な存在となって刊行されたのが、日本語による文芸同人誌『巴茶媽媽』<sup>パチャママ</sup>である。

### 3、同人と掲載作品

『巴茶媽媽』<sup>パチャママ</sup>は、1989 年 9 月にブエノスアイレスで創刊された、日本語による文芸同人誌である<sup>(註7)</sup>。創刊同人は増山朗、関口伸治、宮本俊樹、宮城万里、ホルヘ・ゴンザレスの 5 人であった。「同人紹介」(第 5 号、1991・5)によれば、増山朗は「大正八年二月二日、北海道石狩国札幌郡つきさっぷ村の農家に生まれる。(略)札幌第一中学(昭和十一年卒)、北日本植民学校(服部教一校長)を経て、農業実習移民として、昭和十四年五月、渡重、パンパ平原の一端を知る」とある。先に触れたが、1939 年に外務省の「農業実習移民」としてアルゼンチンに渡り、『巴茶媽媽』創刊時には 70 歳だったことになる。また、「一九四七年、サン・フアン州よりメンドーサ州を経て、マゼラン海峡に至るアンデス連峰の縦走を試みるも果さず。金欠のためバリローチェにて中挫、後、トゥクマン、サルタ、フワイの諸州、またチャコ、ミシオネス、コリエンテスの地域を歩く」とあることから、広くアルゼンチン全土を旅していることがわかる。その際に培ったアルゼンチンの歴史的知識や地方の風俗に触れ、「還暦近くになって、すっかり忘れかけていた日本文字の復習」とともに小説として書くことを始

めた。「南東の風は」など『らぶらた報知』紙上に掲載された作品もある。

関口伸治は「一九五一年四月五日、群馬県桐生市生まれ」とあり、『巴茶媽媽』創刊時は38歳であった。創刊号から第6号まで「ポーランド幻想旅行」を連載するが、それは「一九七三年～七四年、世界半周旅行を決行」した際の経験が素になっている。その後千葉県の中学校教員を勤め、「一九八六年国際協力事業団の開発青年」としてアルゼンチンに渡っている。これは前述した通り、国際協力事業団による「海外開発青年」制度のことであり、『巴茶媽媽』創刊当時はブエノスアイレスの日本語学校である日亜学院校長の職務にあった。

宮本俊樹は「一九五五年十月二十八日、茨城県河内村生まれ」とあり、『巴茶媽媽』創刊時は34歳であった。北海道大学卒業後コンピューター会社に勤務、その後関口と同様に1986年国際協力事業団の海外「開発青年として」アルゼンチンに渡っている。創刊時は「コンピューターの仕事を個人的に行」っており、「ワープロの操作が出来ることから、パチャママの編集を担当している」と記されている。

この増山、関口、宮本の3人が創刊時のみならず、『巴茶媽媽』を刊行していく上での中心的存在であり、「増山さんの物語を何とか活字化したかった」と宮本が述べたように<sup>(註8)</sup>、すでに還暦を越えたアルゼンチン日系社会での長老的人物が書きためていた物語を、コンピュータ技術のあった宮本が活字データ化していった、というのが現状であろう。テクニカルな問題として、宮本の存在が『巴茶媽媽』創刊の大きな要因であったと言ってもよいだろう。それだけではなく、巨視的に捉えるならば、外務省「農業実習移民」と国際協力事業団「海外開発青年」という、ともに公的でありながら、戦前の「移民」と戦後の「移住民」との、永住者と短期的な居住者との出会いによって『巴茶媽媽』は生まれたのである。

ホルヘ・ゴンザレス（「同人紹介」での本名は、ゴンザーレス・ホルヘ・

ゼノン)は、「一九五〇年二月十九日、アルゼンチン・サンタフェ州サン・ホセ・デ・エスキーナ町」生まれの当時 39 歳。ブエノスアイレス日本大使館文化部で日本語を学びその虜になり、1984 年に国際交流基金研修生として日本に留学している。当時は東京に居り、アルゼンチン大使館勤務となった。『巴茶媽媽』には増山、宮本両氏の誘いを受けて参加し、「起源から入る漢字学習手帳」(創刊号～第 4 号、1990・11)を連載している。

宮城万里は日系二世で、日亜学院の日本語教師であった。関口の誘いを受け『巴茶媽媽』に参加している。誌名の「巴茶媽媽」は、彼女の命名であった<sup>(註9)</sup>。それは「インカ族の言葉、アイマラ語」であり、「パチャとは『空間』『時の流れ』、即ち宇宙の現象を指し、ママとは恵みの女神、即ち『母体』を表象」するものであるという。また「現在ではパチャとは人間の生活に必要とする全ての物を与える天地を指すので、パチャ・ママとは『母なる大地』という意味になる」と記されている。

第 3 号 (1990・9) から同人として加わる秋月巖は、「同人紹介」(第 6 号、1991・9)によると「県立高校を卒業後、空白の六年間を経て、突然の来亜」をした、当時 27 歳の青年であった。エッセイ「情熱のピアノズム」に書かれているように、日本ではコンピュータ関連の仕事をしていたようで、宮本とともに『巴茶媽媽』作成の技術者としても大きな存在であったと思われる。

その他、「ドクトル・ナマタメ氏の山師十年」(第 3 号)、「南米で女とつきあう方法」(第 5 号)などのユーモラスな小説を発表している米山南吉、第 5 号から表紙絵を担当する画家エレナ・ダビチーノらを加えて『巴茶媽媽』は歩みを進めていく。「発刊のことば」(創刊号)に「パンパの野は一望の冬枯れである。あまつさえ過ぎる月は 114%、今月には 196%を越える超インフレ、そして勤労者の月収は 50 ドル内外といわれるこの国の社会情勢にあつて、同人誌『巴茶媽媽』を

発刊することは、まさに狂気の沙汰に等しい」と書かれている通り、1980年代から90年代にかけてのアルゼンチンは、国家的経済政策の失敗によるハイパーインフレーションという経済的背景が存在していた。ブラジルと較べると明らかであるが、アルゼンチンの日本語話者数は極少と言える。そのような状態のなかで『巴茶媽媽』は創刊されたのである。「発刊のことば」は「この南米大陸は本当に絶望の大陸なのか。我々が永住するに相応しい大陸ではないのか。あれほど憧れたこの大陸をもう一度見つめ直す心が必要ではないのか。『巴茶媽媽』は、そのような疑問に対する同人五人の闇に向かっての眩きである」と続いている。「南米のパリ」であるブエノスアイレスという大都市と、広大なる平野を持つ希望の大陸であった遙か彼方の地で、日本語による散文表現の同人誌を刊行することの勇気と、独自の作品世界を構想し表現しつつあった『巴茶媽媽』は、掲載作品の多彩さもさることながら、アルゼンチンにおける日本語文学を形成したと言える。

『巴茶媽媽』掲載作でまず触れなければならないのは、増山朗「グワラニーの森の物語」である。先にも触れたように、創刊同人であり、編集長の宮本が「活字化したかった」増山の物語とは、この「グワラニーの森の物語」のことである。創刊号から通して連載された（第7号のみ休載）大長編で、最終号である第10号（1995・12）でやっと「前編」終了後の「中編」に入った所であった。未完の大作である。

また、増山の筆による「巴茶媽媽暦」（第6号～第8号、1992・11）がある。同人の近況と『巴茶媽媽』刊行における関連事項を日記風に記録したものであり、当時のブエノスアイレス風俗も読み取ることが出来る。他にも増山は「巴茶万太郎」の名で「風来坊『ドン・サウセ』ことヤナギ・モリジ夜話」（創刊号、第2号、1990・2）、「ヤナギ・モリジ夜話」（第4号）、「クリストバル・コロンブス第一回航海日誌」（第8号、第9号、1993・11）を書いている。「ヤナギ・モリジ夜話」は老年の主人公である「ヤナギ・モリジ」の独白をユーモラスに描い

た作品で、アルゼンチンの辺境での逸話や郷土風俗が語られている物語である。これは後に掲載される米山南吉「ドクトル・ナタメ氏の山師十年」（第3号）や「南米で女とつきあう方法」（第5号）も同様に、広大な面積を有するアルゼンチン国内での文化的相違を描き出している作品と言えよう。「クリストバル・コロンブス第一回航海日誌」はコロンブスの航海日誌の翻訳形式で描かれたものであり、スペインによるアルゼンチン植民史としても読むことが出来る作品である。

関口伸治「ポーランド幻想旅行」は創刊号から第6号まで連載された長編で、東京大学を休学した主人公である青年が、世界旅行を計画し実行に至るまでの準備と東欧での旅情を物語化した作品である。1970年代の日本の状況を青年の視点で描き出している。また関口は第4号から第7号（1992・2）にかけて4回にわたって「我らイッポ・デ・ハボネス」という、自身が校長を勤める日亜学院による学習風景について報告している。外国語学校としての同校の学習理念と、同地における日本語学習状況。日系移民の子孫に限らない日本語学習者の現状とそれに対応すべく設定される学習シラバス。海外における日本語学校の現状という資料的価値もさることながら、日系移民の日本語に対する意識、さらにはブエノスアイレスにおける、ひいてはアルゼンチンにおける日系社会の日本語という言語に対する姿勢と意識を見ることが出来る。

宮本俊樹は『巴茶媽媽』の編集長であり、小説作品を掲載してはいないが、オラシオ・キローガ「大亀」の翻訳（第2号）や「移民史を訪ねて」を記事として掲載している<sup>(註10)</sup>。第1回に掲載されているビオレータ榛葉は、アルゼンチンに正式手続きを経て入国した最初の日本人である榛葉賛雄の娘であり、イギリス人作家ウィリアム・ギジェルモ・ハドソンの血縁でもある。そのビオレータが語る、父・賛雄の話である。第2回に掲載された高倉謙は、茨城県に生まれ、1918（大正7）年に神戸を出港してアルゼンチンに渡っている。ブエノスアイ

レスに到着後は、蔬菜園での野菜作り、大富豪の家庭奉公、地元裁判官のお抱え運転手、タクシー運転手、マテ茶栽培、洗染店の開業と様々な職を変えた人物である。日本人移民が就いた職業のすべてを体現しているような転職の仕方は、まさに当時のアルゼンチンにおける日本人移民を象徴している。第3回に掲載された小笠原久はアルゼンチン北部のチャコで綿花作りを行った最初期の人物である。チャコ入植当時はアルゼンチンの綿景気は世界的に有名であったが、その後の綿市場の大暴落と害虫の異常発生、イナゴの大発生により、日本人移民の綿作は失敗に終わる。1925年にチャコに入植し、綿作りに関わった小笠原も例に漏れず失敗するが、その後独立し花卉栽培をして生計を立てたことが語られる。

「百才媪の思い出話 語り手・森田ゆくえ女」(第10号)では、森田ゆくえのインタビューを掲載している。ここでの聴き手は増山である。1910(明治43)年に生まれ故郷である広島県双三郡から旅順丸でブラジルに渡った森田は、ブラジル日系移民史では必ずその名を目にする平野運平が監督していたグアダバラ耕地に最初に入植していた。その後、多くのブラジル日系移民たちは平野とともに、彼が新たに拓くことになる「平野植民地」に入植するが、森田の家族はブエノスアイレスに渡った。アルゼンチンでの森田家族はボカ地区の、いわゆる「軍艦長屋」に住み、森田自身は海軍少佐の家庭奉公をしたという。後には、多数の日本人移民を雇用したことで有名な、杉原隆治が経営する馬具工場の生産職人代表となる森田択一と結婚し、一子をもっている。この「森田択一」は増山の小説「グアラニーの森の物語」にも登場するが、その原案はこの「百才媪の思い出話」にあると思われる。

このように、「移民史を訪ねて」はアルゼンチン日系移民の歩んだ歴史を象徴する人物たちにインタビューを行い、記事にしたものであった。まさにアルゼンチン日系移民の歴史が生々の声で語られた、資料

的価値も高い企画であった。

『巴茶媽媽』は小説、随筆、記事、翻訳という様々な形式を取りながら、文芸作品に限ることなく多くの作品を掲載した媒体であった。アルゼンチン日系社会を多面体として捉え、集合させ、日本人移民の記憶を記録化し集積させた、当時のアルゼンチンにおいて唯一の日本語同人誌であった。

『巴茶媽媽』は第8号（1992・11）までコンスタントなペースで刊行されていたが、第9号（1993・11）は1年のブランクが空き、第10号はさらに2年のブランクの後の1995年12月の刊行であり、最終号となった。

終刊の理由は宮本の実務的負担が増加したことであった<sup>(註11)</sup>。中心的な存在の一人であった関口がメキシコに転居したためである。第7号に収録されている「巴茶媽媽歴」には「同年（1992年・筆者註）一月十二日、日曜日 伸治夫妻の壮行を兼ね、『巴茶媽媽』新年例会を俊樹宅にて行う。（略）伸治夫妻を囲んで、マリ、巖、俊樹、朗、郭君とその恋人、伸治の義妹マリッサとそのノビオ、彼一家の新しい門出を祝盃す」、「同年一月二十日、月曜日 伸治夫妻、新しい展望を求めて日本に発つ。昨日はホルヘを迎え、今日は二人を見送る。会う者は別れる。これ必定の運命と知りつつも、この二人の力が欠けた、これからの『巴茶媽媽』の運営を思う時、大変な重荷を感じる。来月にはメキシコに赴任する伸治夫妻の多幸を祈ること切なり」との記載がある。この「巴茶媽媽歴」の筆者である増山も、関口のメキシコ移住は、今後の『巴茶媽媽』刊行の上でも分岐点となる出来事として認識していたことがわかる。関口は同人を離脱したわけではなかったが、アルゼンチンから遠くメキシコの地にあることは、実質的には外地参加の体を取らざるを得ない。実務は宮本の双肩に掛かってくるという現実が待ち受けていたのである。その心理的な状態は押しつづけて、であろう。

#### 4、「グワラニーの森の物語」

増山朗によって書かれた「グワラニーの森の物語」は、『巴茶媽媽』第7号を除いて連載された、未完の大長編小説である。終刊号である第10号の時点で「中編」に入ったばかりという、壮大な構想のもとに書かれ続けた作品であった。「一移民の書いた移民小説」という附言が付され、時々作中に作者の増山も姿を現すことがある作品である。

物語は尚吉とナルシサ夫婦の末息子であった10歳のアンヘリトが亡くなった場面から始まる。尚吉は北海道の石狩平野のはずれに生まれ、移民としてアルゼンチンに渡ってきた人物であり、その地で妻となるナルシサに出会い、ミシオネスの大森林を耕しながら3人の子宝をもうけた。末の息子アンヘリトは生前、産湯を使った清水の湧き出るミシオネスの大森林、グワラニーの森が好きだった。今は魂となったアンヘリトとともにグアラニーの森の物語を紡ぐ体裁をとっている。「願くはアンヘリトの魂よ、我と共に遊べよ」との語りから物語は始まることとなる。しかし残念ながら『巴茶媽媽』の終刊とともにこの「物語」は未完のまま終了してしまっただけで、尚吉とナルシサ夫婦は二度と登場しなかった。

では誰が主人公となって物語は進行していったのか。それが第2章から登場する田中誠之助である。田中誠之助は実在した人物で、アルゼンチン移民史ではミシオネス州に日本人が入植するきっかけを作った人物として知られている。『アルゼンチン日本人移民史 第一巻戦前編』には「田中は1912年アルゼンチンに来て、ブエノス・アイレスで赤手団という団体を結成した。1915年1月にはメンドーサやコルドバを赤手団員と歩き、二百五十家族の日本人を入植させる計画をたてて在チリ公使に援助を要請したりしている。また1915年頃には、十四、五名の団員が「グランハ・ハポネサ」と称する農場に就労していた。ミシオネスかパラグアイで鹿児島県人を中心とする「新日本建設」という理想を赤手団は掲げていたといわれる。さらに田中は日本

人が働いていたガティ・チャベス百貨店の重役レグランドと知り合いになった。レグランドはミシオネス州に二千五百町歩を所有し、日本人五十家族を収容する計画をもちかけてきた。1915年にパラナー河を遡行してエル・ドラード近辺まで踏査した田中は、この地を日本人の理想郷と確信した」(241～242頁)と説明されている。この田中誠之助の人生に沿うように、物語は田中の視点で進行していくのである。

鹿児島県生まれの田中は、契約移民として南米に渡航する者が身の回りに多かったこともあり、若い頃から自分も南米の様子を知りたいと心に決めている。そして土族である父親・虎の理解もあり、30歳にして南米への船上の人となる。その船上で知人となった英国人夫婦にイグアスの「大瀑布のしぶきに当たらずして、南米大陸を語る勿れ」と言われ、ミシオネス州グワラニーを目指す。まずは日本の契約移民が就労しているブラジルの各耕地を巡り、平野運平とも知り合いになる。そしてブエノスアイレスからパラグアイのアスンシオンを目指してラ・プラタ河を北上する。その後イグアスの滝を目指す船上にて一人のイギリス人男性と知り合う。このイギリス人は「果樹園芸試験所の技師」であり、敬虔なクリスチャンでもある人物で、彼から講釈を受ける設定でイグアスの滝とグワラニーの森にまつわる長大な歴史が、キリスト教布教の歴史とともに語られ続けるのである。ここで読者は、日本人移民が生活の地として選択したアルゼンチンという国の広大さと歴史的な複雑さと深さを知ることになる。それは次のように書き表されている。

誠之助は自分と余り年格好もちがわない英人技師の蘊蓄に讚嘆した。かつての学生時代の試験勉強に戻る思いで、記憶止めの帳面を持ち出して、彼の言葉を必死に書きとめた。その言葉の多くは誠之助の耳には全く新しく、諄々と快く、思わず知らず未知の世界へ身も魂も引きずり込まれた。誠之助が聞き馴

れない人名や地名に戸惑ってふと不審顔を上げると、英人技師も口調を止めて懇切な書体で誠之助の帳面に書き入れてくれた。気が付いてみると食堂の中は彼ら二人だけにランプの明りが残されてあった。(第3号)

さらに作者の増山は、小説の途中で「註」を入れ、実際の史実を差し挟んだり、「アンデス越えについては、後の海外植民学校創設者の崎山比佐衛（高知県出身）著「南北米踏破三万哩」の一節を借りよう」（創刊号）と、他の文献からの引用を行うことで日系移民史の文脈を取り入れ、歴史的物語を進行させていくのである。他にも、田中誠之助がミシオネスへの耕作を夢見ながらも日本への一時帰国を余儀なくされ、幾多の事情から樺太への就労をすることになるのであるが、樺太で行われている森林伐採や当時の製紙業事情、アイヌ民族の生態なども描かれることで、物語はより一層信憑性を増し、ふくらみを持つことになる。そしてブラジルやアルゼンチンにおいて実在した移民を登場させることで、アルゼンチンの歴史と日系移民史は一つの大きな物語世界を形作っていく。おそらく増山は、最終的にはアルゼンチンの郷土史としてグワラニーの森を巡る歴史と遙か彼方から渡ってきた日本人移民の歴史とを接続させる物語を描き、豊穡なる森から恵みをうけてきた人類の歴史の延長線上にいる現在地としての尚吉とナルシサ夫婦、さらに無垢なる魂と化したアンヘリトとともに、物語は昇華していくはずであったと考えられる。それは次のような記述から判断出来る。

この物語りは、たった十年にも満たない彼の生命に真心をもって触れ合って呉れた人々へ、彼の真心の伝言を書き綴ろうと願ったものである。尚吉夫婦と共に彼の小さな屍の入棺を手伝った作者は、アンヘリトの余りにもあどけない小天使のほころ

びに……、それは晴れ晴れとした笑顔であった……、そのほころびの中に、ふとそれを託すかのような彼の願いを見てとった。私はアンヘリトの魂に誘われてそれを試みようとした。私も彼の翼に乗って天空を翔てみたい。願わくばアンヘリトの魂よ、我と共に遊べよ。(創刊号)

南米の移民史において使用される「植民地」とは自作農集団が開拓した土地のことであり、「植民者」とはその「植民地の人」との意味である。植民地に入ることを「入植」と言い、入る人を「入植者」と述べる。日系移民たちは、自分たちの土地として「植民地」を拓こうとしたのである。一般的な意味においての植民地というのが、他国を侵略し、支配するという事柄において行われるものであるとするならば、その植民地という社会が終焉した後は、その地で経験された出来事は、支配した側と支配された側の双方において分かち持たれることになる。例えば日本社会と中国社会において「満洲国」という歴史事象を巡って同様の事態が生じ、それぞれの社会の内部において植民地経験が語られてきた。当然日本はアルゼンチンを植民地として侵略した訳ではない。しかし、国策として「移民」を送り込んだ点を共通項として考慮するならば、アルゼンチンにおける「移民」の語り口については考慮が必要である。『巴茶媽媽』の掲載作には「満洲国」での記憶の語りのように、戦後の日本社会と解放後の中国東北社会のように、二つの空間に分けて語られるということはない。つまり、植民者／被植民者、構造的強者／構造的弱者という枠組みによって語られているわけではない。また、隣国のブラジルにおける日系移民のように記憶を「郷愁」と接続させて語るわけでもない。細川周平が指摘するように、ブラジル日系移民は「…郷愁はある程度論じられてきたが、遊牧性や流動性が高唱される昨今の論調のなかでは、理性を曇らせ、判断を後退させる否定的なことと捉えられることが多い。知識人

は郷愁を売り物にする産業を皮肉ったり、ナショナリズムと頭ごなしに同一視したり、政治的の改革を阻む保守的要因と見なしている。(略)しかし大半の移民は賢そうな批判をよそに、故郷に思いを馳せてきた。郷愁をその思いに共感しながら考えるほうが、上滑りな理論作りよりもずっと大切だ」(『遠くにありてつくるもの』みすず書房、2008・72頁)として、絶えず自己認識、同族意識の核として「日本人」であることを様々の行動や文章化を通して自覚し、表現し続けてきた。内地日本においては無自覚的にこの意識・認識は保たれるが、移住先では既存の社会や文化体制下で、「移民」が率先してその同族性を作り出すべく制度を打ち立てなければならない。ブラジル移民研究者の前山隆が「日本を出て初めて人々は『日本人』になった」(『異文化接触とアイデンティティ』御茶の水書房、2001・2)と述べるのは、日本では自明の事柄がブラジルでは特異な事柄となり、そのために移民は自己の再定義を行わなければならなかったとの意味である。日本の文化は必ずしも移民国の政策や国益と一致したわけではない。日本内地ではありえない現地でのトラブルを移民たちは経験してきた。しかし、現地への適応を優先事項としたアルゼンチン移民たちは、大文字の「日本」意識への接続によるアイデンティティの維持には向かわなかった。その点が大きな違いである。この意識は「グワラニーの森の物語」において、次のように書かれている。

その晩、徳治は、一家は当分ブエノス・アイレスに踏みとどまり、徳太郎と忠雄を学校に通わせて、この国の言葉を習得させ、一家の道案内役に仕立て、自分は藤坂さんのすすめる鉄工所で働き、家族の養い分を稼ぐ、との考えを加登に計った。加登としても今日の町見物に福々しい道案内役をつとめてくれた初枝の物知りに感心し、出来たら我子たちも両国語を自由に喋れるようになって欲しいと思<sup>マ</sup>って<sup>マ</sup>た矢先なので、夫の計画にわけも

なく賛成だった。(第10号)

帰山徳治が一家を伴ってアルゼンチンに到着したものの、迎えに来ているはずのイギリス系会社の社員の姿が見えずに途方に暮れていた所、港で運良く日本人移民に会い、一晚宿泊させてもらった翌日の描写である。日本を出、異国において生活を確立するためには自立しなければならない。自立するためには、異国の地で適応しなければならない。適応するためには、その土地の言葉を覚えなければならない、という思考が当たり前のこととして描かれている。ブラジルとアルゼンチンとでは移民政策の相違もあろうが、一財産作るまでの出稼ぎ意識で、日本人移民同士寄り集まって暮らし、交渉は通訳に任せるような意識とは全く異なるものとして描かれるのである。

この帰山徳治も実在した人物で、ほぼ「グワラニーの森の物語」に描かれている通りの人生を送っている<sup>(註12)</sup>。1888年に北海道札幌郡江別町に生まれ、田中誠之助の「南米の理想郷ミシオネス」という雑誌掲載記事を読んでその魅力にとりつかれ、田中に連絡を取り、田中の知り合いのイギリス人に身元引受人になって貰い、1920年6月に妻加登と5人の子どもを連れてブエノスアイレスに渡った。最初は杉原隆治の鉄工所で働き、数ヶ月後にロサリオ郊外の農園に転居。もともとミシオネス州で農業を営むことが目的であり、少しずつだがその目的に近づいている。翌年にはミシオネス州ボサーダスにて小さな家を借り、生活を始める。その後、同州サンタ・アナに適当な土地が見つかり、購入する。これがミシオネスにおける日系移民社会発展の始まりであり、その最初の人物こそ帰山徳治なのである。

## 5、総体としての『巴茶媽媽』

「グワラニーの森の物語」は完結しなかった物語であるが、決して一つの小説としてのみ語られる訳ではない。同じ作者である増山朗の

「実習生」(第5号)やエッセイ「歴史のこぼれ葉」(第7号)、ペンネームである巴茶万太郎を使用した「風来坊『ドン・サウセ』ことヤナギ・モリジ夜話」(創刊号、第2号)や「クリストバル・コロンブス第一回航海日誌」(第8号、第9号)、米山南吉の「ドクトル・ナマタメ氏の山師十年」(第3号)、さらに第6号から第9号まで連載される篠原修平<sup>(註13)</sup>の「興亡の灰」もまた、物語の形式を取りながらも史実の記録として作用している。当然各々の作品は、各々の作者自身によって紡がれた物語であることに変わりはない。しかし同じ媒体でそれぞれの作品が掲載されるということは、アルゼンチンにおける歴史を語る記録として、作品間において相互作用していることは指摘できる。それらは『巴茶媽媽』という総体として、お互いの物語を補強する働きを持つことになる。様々な表現方法と多くの物語世界が組み合わせられることにより、それぞれの作品はより輻輳性を生み出すことになる。その代表的な作品となったのが増山朗の「グワラニーの森の物語」であった。増山が「十年ほど前から、『グワラニーの森の物語』に手を染める。発表の目当ても無いままに幾度も書き変える」(前出「同人紹介」と記した物語世界は、時代の流れによるテクノロジーの進歩と、その恵みを享受した宮本俊樹の技術をはじめ、同人たちの熱意により、活字化され、『巴茶媽媽』を舞台として結晶していった。

『巴茶媽媽』は、「パチャママ」(=母なる大地)において、壮大なアルゼンチンの歴史と風俗、その地にやって来たヨーロッパからの移民の歴史と日系移民の歴史、そして戦前からの移民と戦後の移住民との出会いによって、それらを滋養としながら、日本語という「言の葉」を繁らせたのである。

(もりや たかし・法政大学大学院国際文化研究科兼任講師)

本論文は2011年度科学研究費補助金に採択された、基盤研究C「南米日系移民および韓国系移民による文学に関する総合的研究」(研究代表者・川村湊)による研究成果の一部である。

2011年8月、アルゼンチン・ブエノスアイレス、ブラジル・サンパウロでの研究調査の際、多くの方々にお世話になった。藤澤友子氏、園田昭憲氏、チョン・ギウン氏、曹美姫氏、久田アレハンドロ氏、高木佳奈氏、崎原朝一氏、丑野隆史氏、土井英明氏、秋月巖氏、宮本俊樹氏。この場を借りて皆様に改めて感謝申し上げます。宮本氏には2011年9月、お忙しい中ブエノスアイレスで入手出来なかった『巴茶媽媽』を帰国後大阪で貸して頂き、さらに創刊と終刊に関しての貴重なお話をうかがった。

## 註

- 1 『ブラジルにおける日本人発展史』上巻(ブラジルにおける日本人発展史刊行委員会、1941・12)
- 2 『アルゼンチン日本人移民史 第一巻戦前編』(在亜日系団体連合会・FANA、2002・6)には、史実として登場するアルゼンチンにおける最古の日本人として、奴隷売買されることへ告訴して裁判で勝訴し自由の身になったフランシスコ・ハボン(Francisco Xapon)、ブエノスアイレスのコロン劇場での1873年3月8日付きの公演ポスターに出演の記載がある曲芸団「サツマ」一座、1886年アルゼンチンに入国したと言われている定着移民第一号である牧野金蔵。彼らについての詳細も記載されている。
- 3 農林水産省「世界の食糧自給率」HP [http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu\\_ritu/013.html](http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/013.html)
- 4 『データブック・オブ・ザ・ワールド2008』(二宮書店、2008・6)によるとアルゼンチンの民族構成は、南ヨーロッパ系白人97%。残り3%をメスチソ(白人と先住民インディヘナとの混血)、インディヘナ(グアラニー族、ケチュア族)、アフリカ系黒人、アジア系、などが占める。
- 5 前出『アルゼンチン日本人移民史 第一巻戦前編』35頁。
- 6 『国際協力事業団年報1986』(国際協力サービス・センター、1986・10) 348頁。
- 7 『巴茶媽媽』のスペイン語翻訳版も2冊刊行されている。

- 8 筆者と川村湊教授は2011年9月18日、宮本俊樹氏と大阪府難波にてお会いした。その際、『巴茶媽媽』についてのお話をうかがうことが出来た。
- 9 同註8の際、うかがった内容である。
- 10 「移民史を訪ねて」は合計3回掲載された。「第一回ピオレータ・榛葉さん」(創刊号)、「第二回高倉謙氏」(第2号)、「第三回小笠原久氏」(第4号)。さらに増山を「聴き手」として「百才媼の思い出話 語り手・森田ゆくえ女」(第10号)も掲載されている。
- 11 同註8の際、うかがった内容である。
- 12 前出『アルゼンチン日本人移民史 第一巻戦前編』242頁～243頁参照。
- 13 篠原修平は同人・秋月巖のペンネーム。